

# ～ ～ ～ 海洋島 ～ ～ ～

第4巻 第8号 (通巻37号)

東京都小笠原水産センター

東京都庁総務局小笠原支庁

2003年3月10日発行

〒100-2101 東京都小笠原村父島字清瀬

04998-2-2545

Fax. 04998-2-2546

## パヤオのもうひとつの可能性

これまでに、小笠原水産センターでは浮魚礁(通称パヤオ)の導入試験を進め、その効果を調査してきました\*1。パヤオは回遊性魚類を対象にした人工魚礁の一種ですが、この利用を一般の漁業はもちろんのこと、遊漁(ゆうぎょ:レジャーとしての釣り)でも併せて検討してみてもどうでしょうか。

小笠原の海には多くの魚種が生息し、漁業対象になっているものも多くいます。生物種の多様性という面では豊かな海であるといえるでしょう。しかし、定着性の強い底魚類のいくつかの種類については、資源水準が低い状態にあることも事実です。そして、これらの魚種を一般の漁業と遊漁の両方で自然の生産力を上回って利用し、そのことが資源枯渇の一因となってしまうことが懸念されています。一般の漁業と遊漁とは互いに対立する関係にあるものではなく、地域経済の発展のためにも共存を図るべきものだと考えられますので、将来を見据えればこの問題を看過してよいとは思えません。

そこで、地域全体で限り有る水産資源を有効に利用し末永く共存共栄を図るため、利用する魚種を区分していくことも今後は必要となってくるでしょう。漁獲対象をずらしていく“ターゲットシフト”の導入です。小笠原には漁業資源としては価値が低くても、遊漁、特にスポーツ性が高いといわれるゲームフィッシングの対象魚(ゲームフィッシュ)としては価値の高い魚種もいます。例えばパヤオ周辺に集まるキハダ等マグロ類の中小型魚、ツムブリ、シイラなどの表層回遊性魚類(写真1)がそうです。遊漁の主な対象をこれらに移行し、一般の漁業においても資源が減少しているハタ類等の底魚類から、今まで以上に他の回遊性魚類等へと移していくことができれば、今後、漁獲の総量

は若干増加しても、個々の資源に対する漁獲圧力は軽減され、長続きする水産資源の利用が期待できます。パヤオ設置の事業化とルールを遵守したうえでのパヤオ利用方法の拡大は既存の漁船漁業にとってもプラスに働く可能性を秘めていると思います。

小笠原水産センターでは、効率良く無駄なく「とる技術」や、商品としての魚を「つくる技術」の開発に加えて、たいへん難しい課題ですが、現状の漁業水準を保ちつつ、いかにして水産資源そのものを潰さずに良好な漁業を維持し発展していけるのか、いうなれば「とり続けられる技術」とそれを実現するための方策を関係機関と協力し合いながら小笠原地域の人びととともに探っていきたいと考えています。漁業関係者の方々や遊漁関係者の方々など、ぜひ、ご意見をお寄せください。

\*1 パヤオの関連記事は「海洋島」19号を参照してください。なお、水産センター試験礁は現在すべて撤収しています。



写真1: ゲームフィッシュとしても有望な回遊性魚類